

日本天文学会早川幸男基金渡航報告書

2011年06月10日採択

申請者氏名	武井大 (会員番号 4814)
連絡先住所	60 Garden Street, Cambridge, MA 02138, USA
所属機関	Harvard-Smithsonian Center for Astrophysics
職あるいは学年	PD : 学振
任期 (再任昇格条件)	2年 (再任不可)
渡航目的	研究集会での招待発表
講演・観測・研究題目	The Impact of Suzaku on the knowledge of CVs
渡航先 (期間)	イタリア (2011年09月12日 ~ 09月17日)

早川幸男基金による研究会参加費および滞在費の援助を受け、2011年9月12日からイタリアのパレルモ市で開催された国際研究会 ”The Golden Age of Cataclysmic Variables and Related Objects” にて招待講演を行った。本研究会は、白色矮星連星系および激変星について議論する総合的な場として、毎年かたちを変えて開催されているものである。私は一昨年にポスター発表、昨年には口頭発表を行い、そして今回はついに招待講演を担当することができた。研究会には約100人弱が参加した。特に今回は1週間にわたって交通機関の乏しい場所にあるホテルに泊まり、朝から晩まで研究者同士が寝食を共にするという、極めて濃密なものであった。イタリアの研究会らしく、昼休みが4時間近くもあり、夕方の17時からセッションが新たに始まる点も印象深かった。

会場は、イタリアのシチリア島に位置するパレルモ市からさらに郊外へと進み、モンドッロという街にある Splendid Hotel La Torre で行われた (Figure 1)。米国の東海岸 (ボストン) からは、まず飛行機でワシントン DC まで1.5時間、イタリアのローマまで10時間、シチリア島まで1時間、さらにそこから会場まで車で1時間と、乗り換えを入れて1日ほどかかる長旅である。シチリア島では、タクシーの料金メーターは当然のごとく動かしてもらえず、なぜか請求額は交渉次第で半額



図 1: 会場のカフェテラスより撮影。

近くにもなるほどであった。また運転は非常に激しく、道を間違えて高速道路にもかかわらず後進するという荒業も見せてくれた。茶目っ気たっぷりのタクシー運転手、そしてなにより無事に生きて旅を終えられた奇跡にまずは感謝したい。

さて、本研究会で私は ”The Impact of Suzaku on the knowledge of Cataclysmic Variables” というタイトルのもと、30 分間の招待講演 (25 分の口頭発表、および 5 分の質疑応答) を担当した (Figure 2)。研究会の主催者より、本講演では日本の X 線天文衛星「すざく」による激変星の観測結果のレビューが求められていた。そこで私は、「すざく」衛星の打ち上げから約 6 年間にわたる全ての観測結果を紹介した。これらは強磁場の白色矮星連星系や矮新星爆発、古典新星爆発など、多岐にわたるものであった。さらに申請者の博士論文の内容 (X 線による古典新星の観測的研究) を軸として、なかでも記者発表などが行われたインパクトの強いと思われる科学的成果を詳細に取り上げた。将来的な激変星の研究計画や、日本が 2014 年に打ち上げを予定する次期 X 線天文衛星「ASTRO-H」の紹介なども行った。これらの内容は、研究会のまとめとして最後に行われた ”Concluding Remarks” のセッションでも大きく取り上げられた。さらに総まとめとして最後に行われた写真紹介では、一番最後のスライドが私の写真で締めくくられ、とても嬉しかったと同時に研究成果を十分にアピールする事ができたと実感した。



図 2: 研究会における申請者の発表。

研究会には、日本を含み世界中から白色矮星連星系や激変星の研究者が集まった。博士論文の執筆時にお世話になった共同研究者をはじめ、著名な理論家、様々な波長の観測家、新たに研究を始めた学生たちと、ときにはワインやエスプレッソを片手に白熱した議論を繰り広げた。また、現地パレルモの研究所に所属する他分野の研究者とも知り合いになり、今回の渡航を契機としてまったく新しい研究を始めるきっかけを作ることができた。これぞまさしく、国際研究会の醍醐味といえるだろう。

以上まとめとして、今回の国際研究会では博士論文の内容に即した招待講演を担当し、また同内容を研究する様々な人々と議論をすることができ、極めて有意義な海外渡航を経験することができた。最後に、今回の研究会参加費および滞在費を援助いただいた早川幸男基金、日本天文学会、およびそれを支える関係者全ての方々に深く感謝したい。